

社会復帰したうつ病患者の配偶者が経験した日常生活における困難感

著者	中村 太志
発行年	2017-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10422/00012282

氏 名 中村 太志

学 位 の 種 類 修士 (看護学)

学 位 記 番 号 修士第219号

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第3条第1項

学 位 授 与 年 月 日 平成29年 3月10日

学 位 論 文 題 目 社会復帰したうつ病患者の配偶者が経験した日常生活における困難感

審 査 委 員 主査 教授 遠藤 善裕

副査 教授 足立 みゆき

副査 講師 坂東 春美

論文内容要旨

※整理番号	224	(ふりがな) 氏名	なかむら たいし 中村 太志
修士論文題目	社会復帰したうつ病患者の配偶者が経験した日常生活における困難感		
<p><研究の目的> うつ病患者と共に過ごすなかで、配偶者が経験した日常生活における困難感を、現象学的手法を用いて明らかにした。</p> <p><研究の方法> 以下の基準に合致するものを研究対象者として半構成的面接を行った。 ①DSM-4-TRおよびDSM-5に基づきうつ病(大うつ病性障害)と診断された通院治療中の方の配偶者 ②うつ病の発症が多い年代であり、一定の社会的役割を担うと考えられる30歳代以上、60歳代以下 面接内容を逐語録に起こし、現象学的手法を用いて困難感に焦点を当て、対象の語りにてできるだけ忠実にテーマとして抽出した。</p> <p><結果> 対象は、うつ病患者を配偶者にもつ3名で、60代女性Bさん、60才女性C名、50才男性Cさんの計3名であった。うつ病患者の配偶者が経験した困難感を表すテーマとして、Bさんから「誰にも相談できない」「人との交わりが切れていく」「一人で居られる時間がない」「病気のために同じことをしつこく言われる」「病状を気にして本人に何もいえない」「主人を優先する思いが伝わらない」「何が原因か分からない」という7のテーマ。Cさんから「うつ病になることが理解できない」「家族として一番いい接し方ができない」「夫がうつ病から立ち直れない」「生きてはたいが食事は拒否する」「夫の訴えだけで薬が強くなる」という5のテーマ。Dさんから「見たこともない主人」「精神科からすぐには退院できなかった」「自分の言葉で重荷を与えてしまう」「夫の症状について聞ける場がない」「自分で考えても何度も失敗する」「信じることを否定されてしまう」「どうしようって思うような金額」「知らないところで娘に我慢をさせていた」「なんでを止められない」という9のテーマをそれぞれ得た。</p> <p>これらに共通するテーマは、「なんで、というやる瀬のない思い」「配偶者としての患者との接し方」の2つで、配偶者の困難感には配偶者がうつ病になったことや現状など配偶者を取り巻く全てに対する分からなさ・悲しさ・辛さという困難感とうつ病となった夫に対して家族として接する際の難しさ・しんどさという困難感がある。</p> <p><考察> 社会復帰したうつ病患者の配偶者の日常生活における困難感には配偶者と患者・家族・環境との間で葛藤を伴って生じるという特徴があった。配偶者は患者と関わる中でなんでというやる瀬のない思いが強いため、配偶者との信頼関係を築き医療者の側から配偶者に対し、思いの表出を促すきっかけを用意する。それには第三者の介入が必要であり、家族会などのすすめや、配偶者を対象とした面談の時間をもつ必要がある。また外来においても継続する必要性が示唆された。また常にそばにいる配偶者だからこそ患者との接し方に難しさを抱えていることが明らかとなり、レスパイトケアなど一時的にケアの代替の代行を提供するなど精神的疲弊を軽減する支持的ケアの必要性が示唆された。</p> <p><総括> うつ病患者の配偶者は、うつ病患者を支えるキーパーソンでもあり同時に、普段の生活とは比べるべくもないほどストレスフルな生活を送る、いわばうつ病のリスクの高い集団でもある。このようなうつ病患者の配偶者に対し支援を行う際には、本研究がその一助となれば幸いである。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1,200字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。